鳴門教育大学附属中学校

学 校 関 係 者 評 価 報 告 書

（平成２２年度）

平成２３年３月

学 校 関 係 者 評 価 委 員 会

目　　次

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

Ⅰ　学校関係者評価結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　3

Ⅱ　評価項目ごとの評価　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

　１．楽しい学校　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

　２．美しい学校　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　３．活力ある学校・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　・・・・・6

参考：学校の現況及び目的

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について

はじめに

本報告書は，保護者，学校評議員，大学教員，地元の企業経営者で構成された学校関係者評価委員会が，附属中学校の教育活動の観察や校長ほかとの意見交換等を通じて，附属中学校の自己評価の結果について評価することを基本に学校関係者評価を実施し，その結果を報告書として取りまとめたものである。

１　評価の目的

学校評価は，次の３つを目的として実施するものである。

① 学校が，自らの教育活動その他の学校運営について，目指すべき目標を設定し，その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより，学校として組織的・継続的な改善を図ること。

② 学校が，自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により，適切に説明責任を果たすとともに，保護者，地域住民等から理解と参画を得て，学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。

③ 学校の設置者等が，学校評価の結果に応じて，学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講ずることにより，一定水準の教育の質を保証し，その向上を図ること。

２　評価のスケジュール

２２年７月	第１回学校関係者評価委員会(委員長の選出，評価項目ごとの評価担当者の決定)
９月	文化祭参観，校長との意見交換
１０月	オープンスクール参観，校長との意見交換
２３年３月	第２回学校関係者評価委員会（評価報告書のまとめ)

３　学校関係者評価委員会委員(平成２３年３月現在)

	稲木　紀彦	(株)トクジム代表取締役社長
	手束　直胤	附属中学校学校評議員
○	成川　公昭	鳴門教育大学大学院教授
	濱野　正裕	保護者会会長

○は委員長

4　本評価報告書の内容

⑴ **「Ⅰ学校関係者評価結果」**

「Ⅰ学校関係者評価結果」では，「Ⅱ評価項目ごとの評価」において評価項目１から３のすべての評価項目の内容を総合的に判断し，４段階評価で記述しています。また，学校の目的に照らして，「主な優れた点」，「主な改善を要する点」を抽出し，上記結果と併せて記述しています。

⑵ **「Ⅱ評価項目ごとの評価」**

「Ⅱ評価項目ごとの評価」では，評価項目１から３において，当該評価項目が達成されているかどうかの「評価結果」及び，その「評価結果の根拠・理由」を記述しています。加えて，取組が優れていると判断した場合や，改善の必要がある場合には，それらを「優れた点」及び「改善を要する点」として，それぞれの評価項目ごとに記述しています。

⑶ **「参考」**

「参考」では，自己評価書に掲載されている「Ⅰ学校の現況及び目的」を転載しています。

5　本評価報告書の公表

本報告者は，鳴門教育大学に提供するとともに，設置者に提出します。また，ウェブページ（http://www.kinsch.naruto-u.ac.jp）への掲載により，広く社会に公表します。

Ⅰ　学校関係者評価結果

鳴門教育大学附属中学校の学校関係者評価は，内容を総合し，４段階評価中の「　A　」と判断する。

主な優れた点として，次のことが挙げられる。

○　学校活動をより良くするために，多くの新たな試みが為されている。社会の状況が目まぐるしく変化する中で，従来のことだけにとらわれず，よいと思われるものを積極的に取り入れそれを実践する姿勢は高く評価できる。

○　総合的な学習の時間において，探究活動を通し教科学習で培った基盤を基に，自ら考える姿勢や多角的なものの見方を養おうとする実践を行っている。昨今，与えられたものを無批判でそのまま受け入れてしまい，様々な溢れる情報に振り回される傾向の中で，しっかりと物事の真偽を見極めることのできる目と姿勢を養うことになると高く評価できる。

○　学校生活の場としての学校環境づくりに取り組んでいる。ボランティア部をはじめとした美化，奉仕活動等，教室環境，学校環境の整備は，心豊かな生徒の育成を促し，ひいては全人格の形成へとつながると確信する。

○　多くの教員が地域の拠点校として指導的役割を果たしている。通常業務で多忙の中，地域の教育界を担っているという自負のもと，自らの研鑽を怠らず，指導的役割を果たしていることは評価される。

主な改善を要する点として，次のことが挙げられる。

○　学校をあげての努力にも拘わらず，不登校生徒の解消には至っていない。人数は多くはないが，それぞれの生徒にとってはきわめて深刻な問題である。その問題の困難さは十分に理解できるが，教職員，保護者，専門家，さらには関係機関等，生徒を取り巻く関係者が力を合わせて取り組む体制をしっかりと作り，問題解決に当たることが望まれる。

○「学校関係者評価結果」は，次の４通りで判断します（「Ⅱ評価項目ごとの評価」の判断も同じ）。

A　十分達成されている

B　達成されている

C　取り組まれているが，成果が十分でない

D　取組が不十分である

○上記の他，「学校関係者評価結果」として，評価項目の観点ごとに抽出した「優れた点」，「改善を要する点」を要約し記述します。なお，「優れた点」，「改善を要する点」を要約するに当たっては，当該学校の目的に照らして，重要な位置付けにあると考えられる取組状況を考慮した上で，精選・整理したものを記述します。

Ⅱ　評価項目ごとの評価

評価項目１　楽しい学校

【評価結果】 以下の内容を総合し，４段階評価中の「　A　」と判断する。

（評価結果の根拠・理由）

観点１－１　確かな学力の向上：読書習慣確立への取組ができているか。

本年度より新たに NIE の実践，絵本の読み聞かせに対する取り組みを行っている。NIE の実践においては，「徳島未来構想」と銘打った模擬県議会を開催し，新聞をそのための資料として活用している。この試みは単なる読書習慣の確立にとどまらず，溢れている多くの情報を整理し，それらの信頼性に対し疑問を持って臨む姿勢や，その裏に隠された本質を見抜く力を育成するものとして高く評価される。絵本の読み聞かせは，子供たちに読書の世界へ目を開かせるとともに，頭の中で世界を広げ，人格を形成してゆくきっかけを与えるものになると考えられる。

従前よりの F タイム，昨年度よりの「日本一周読書の旅」プロジェクトも継続して実施されており，多くの場面において読書とふれあう機会が企画されている。また，そのそれぞれにおいて人格形成に与える影響を考慮した工夫がなされており，その成果が期待される。

観点１－２　確かな学力の向上：各種検定への取組ができているか。

新学指導要領への移行の中で，プラス 1 タイムとして各種検定等に挑戦するための自由裁量の時間が設定され，学校組織としての取り組みがなされている。その結果，多くの生徒が，漢字検定，日本語検定，国際算数・数学能力検定等の各種検定において合格を果たしている。そのほか，感想文コンクールや作文コンクールにおいても学校賞を受賞し，着実に成果が上がっている。これらの成果は，それぞれ生徒自身の励みになり，さらに高いレベルに引き上げる原動力になると期待される。今後，計画的に十分な時間を確保することにより，生徒一人一人が自らの特性を発揮し，伸ばすことができる場がさらに広がるよう期待する。

観点１－３　確かな学力の向上：学校行事，儀式，集会等の取組ができているか。

過去より培われてきた伝統は様々な場においてあらわれ，それを肌で感じ，受け止めることにより，人間としての成長が促されるものである。特に，学校行事や集会はその大きな場であるが，新入生歓迎音楽会，体育祭，文化祭等，生徒を主体とした取り組みがなされている。これらに積極的に取り組むことにより，附中生としての意識を高めるとともに，クラスや学校を構成する一員とし

ての自覚が生まれているようである。これらは学校側が押しつけるのではなく，生徒が主体となり作り上げていくのをサポートする立場に徹している様子がうかがわれる。その姿勢は高く評価できる。

観点１－４　確かな学力の向上：効果的な部活動への取組がなされているか。

限られた時間の中で多くのクラブがメリハリのある部活動を行っている。短時間の中で十分に効果が上がるよう，工夫しながら集中した活動がなされている。その結果，各種大会において優秀な成績をおさめたものもある。部活動は正課の授業では得られない経験を積むことができ，生徒にとっては得難い教育活動の場であるが，大会等への参加に伴う教員の負担がどのような状況であるのか憂慮するところである。

評価項目２　美しい学校

【評価結果】 以下の内容を総合し，４段階評価中の「　Ｂ　」と判断する。

（評価結果の根拠・理由）

観点２－１　安全安心な学校環境づくりができているか。

生徒の活動の場としての学校環境の整備は十分配慮され行われていると判断できるが，事故は思わぬところから起こってしまうものであり，教職員一人一人が引き続き注意を払って毎日を送られるようお願いしたい。安全な登下校についても十分な指導がなされているようであるが，本校は遠方より通学している生徒も多数おり，特別な事情を抱えている。さらに引き続き指導の徹底を期待する。ボランティア部による美化奉仕活動は生活の場たる環境づくりの基本であり高く評価できる。この輪が広がり，多くの人がこれに関わるようになっていくことを期待する。

観点２－２　命を大切に：ＬＦＴ（ライブ附中タイム）の取組ができているか。

LFT は本校ならではの取り組みとなっており，それぞれに特色ある内容の講演がなされている。これらは，いずれも幅広い視野，鋭い感性を持った心豊かな生徒の育成に大きな役割を果たしたものと思われる。また，保護者会講演会も開催されており，生徒，教員，保護者が一体となって教育活動を進めていこうとする姿勢が感じられ高く評価できる。新たな教育課程の編成の中で重点項目として位置づけ，引き続きこの取り組みを推し進めて行かれることを希望する。

観点２－３　心の居場所づくり：人権教育及び生徒指導の取組ができているか。

不登校生徒の解消に向けて，苦心しながらも学校をあげて取り組みがなされている様子が伺われる。これらは，それぞれに異なったところに起因しているところもあり，統一的には対応できない問題である。また，現代の社会の構造に原因の一端があると思われるものもある。さらにはその原因すら見いだせないような事例もあるようであり，その深刻さにも拘わらず，不登校に至る原因と経緯の複雑さが問題の解決を非常に困難にしているようである。その結果，専門家のアドバイスも仰ぎながら改善に取り組んでいるにもかかわらず，問題の完全解決には至っていない。さらに引き続き，教職員，保護者，専門家，さらには関係機関等，生徒を取り巻く関係者が一体となった忍耐強い取り組みを要望する。

人権教育に関しては，道徳の時間をはじめとして，集団宿泊活動，修学旅行，校外学習等に組み込んで取り組まれている。これらの時間確保はもちろんであるが，学校生活のあらゆる場において常に相手の人格を尊重した生活を送ることができるような学校環境の構築に当たってほしい。

評価項目３　活力ある学校（資質向上の取組）

【評価結果】 以下の内容を総合し，４段階評価中の「　Ａ　」と判断する。

（評価結果の根拠・理由）

観点３－１　研究活動の充実：思考力・判断力・表現力を育む授業の取組ができているか。

研究発表会のテーマを「思考力・判断力・表現力を育む授業の創造」として，それに向かって研究を進めている。本研究発表会は研究活動の中心として位置づけられ，この発表会に向かって研究を進めていく過程の中で，段階的にその目的に向かった授業が構築されてきている。理論面においては，それぞれの専門教科の大学教員と議論を行うことにより実践の裏付けを行っており、附属中学としての特色を生かしている。その他の授業においても，このテーマを念頭に置いた展開がなされており評価できる。

観点３－２　研究活動の充実：研究活動拠点への取組ができているか。

地域の研究拠点校として各教科研究委員会の事務局を多数置くとともに，各種研究会がもたれている。また，それぞれの教員が研究会において発表，指導助言，講演等を行っており，地域の教育界を牽引している。その実績は附属中学の使命の一つを十分に果たしていると判断できる。一方で，学校の通常業務に加え多くの業務を抱えることになり，負担の増大は否めない。それぞれの教員が余裕を持って研究活動に当ることができるようよう十分な時間の確保ができる手だてが必要と思われる。

観点３－３　新しい教員評価の導入：PDCA サイクルに基づく自己評価への取組ができているか。

教職員一人一人が PDCA サイクルに基づいて実践を行っている。これが形だけのものにならず，本質的に機能し，授業をはじめとした学校活動全体の改善に結びつくよう今後の運用に期待する。

参考

Ⅰ　学校の現況及び目的

１　現況

⑴ 学校名　鳴門教育大学附属中学校

⑵ 所在地　 徳島市中吉野町１丁目 31 番地

⑶ 学級等の構成

１学年 ４学級　　２学年　４学級

３学年 ４学級　　 計 12 学級

⑷ 児童数及び教員数(平成 22 年５月１日)

生徒数 470 人　 教員数 22 人（正規教員）

２　目的

⑴目的・使命

本校の目的は、附属中学校校則第１条において「小学校における教育の基礎の上に、心身の発達に応じて、義務教育として行われる普通教育を施すとともに、鳴門教育大学（以下「本学」という。）における生徒の教育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の教育実習等の実施に当たることを目的とする」と定めており、本校は義務教育を行う任務とともに、教員養成大学の附属中学校として、次のような使命をもった学校である。

①大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学的研究を行う研究学校としての使命

②地域の教育諸課題の解明、参観者への指導・助言、文部科学省・県教委・地教委等教育関係機関からの要請による教員派遣など、教育界の発展に寄与する使命

③鳴門教育大学の学部学生及び大学院生の教育実習等を行う使命

⑵教育目標

本校は、校則第１条に示されている中学校教育の目的の達成のため、次のような教育目標を掲げ、めざす生徒像・教師像・学校像を明確に示している。

○知・徳・体の調和的人格の完成をめざし、自主・自立の精神、創造的能力、豊かな人間性をそなえ、国際社会の発展に寄与することのできる心身ともにすこやかな中学生を育成する。

めざす生徒像

○目標を持ち、自主的、創造的に学ぶ生徒

○強靭な意志と体をもち、たくましく生き抜く生徒

○優しく思いやりの心をもち、人につくす生徒

めざす教師像

○生徒を愛し、生徒とともに伸びる教師

○強い使命感、鋭い教育観をもった教師

○優れた指導力をもった教師

めざす学校像

○創造的な知性を磨く学問学校

○情熱的な意志を鍛える鍛錬学校

○強健な身体を練る体育学校

○敬和奉仕の精神に生きる人間学校

⑶平成２２年度重点目標

鳴門教育大学との連携を密にし、中期目標・中期計画・本年度計画の実現に努めながら、次の３本柱６項目から教育目標の具現化を図る。

①楽しい学校

②美しい学校

③活力ある学校

⑷評価項目

①楽しい学校

（確かな学力の向上）

〇読書習慣確立への取組の状況

・ＮＩＥの実践

・絵本の読み聞かせ　・Ｆタイムの充実

・「日本一周読書の旅」プロジェクトの実施

〇各種検定への取組の状況

・プラスワンタイムの活用

〇学校行事、儀式、集会等の取組の状況

・附中文化の継承と発展

〇部活動への取り組み

②美しい学校

（安全・安心な学校環境づくり）

・校舎外壁の塗装

・エアコンの導入

（心の居場所としての学校・学級づくり）

・絵本の読み聞かせ

・予防教育の開始

（命を大切に）

〇ＬＦＴ（ライブ附中タイム）の取組の状況

・講師陣の開発と充実

〇人権教育及び生徒指導の取組の状況

③活力ある学校

（資質向上の取組）

〇研修

〇「新しい教員評価」の導入

（研究活動の充実）

〇思考力・判断力・表現力を育む授業への取組

・各教科における言語活動の充実

・新学習指導要領への移行措置の確実な実施

〇研究活動拠点の取組の状況

・教科等研究会の積極的な誘致

・ホームページ等での情報発信力の強化